

# 令和元年度研究の報告

海田町立海田南小学校

## 1 研究主題

主体的・協働的に学び、自分の考えを深める児童の育成  
～資質・能力を育む「課題発見・解決学習」の授業づくりのあり方～  
～児童の多面的・多角的な思考と価値観への気づきを促すための  
道徳科の発問の工夫を通して～

## 2 主題設定の理由

### (1) 現在の教育の動向から

平成29年3月に小学校学習指導要領が告示され、新しい時代に必要となる資質・能力が「知識及び技能」「思考力、判断力表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理された。

また、「子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、これまでの学校教育の蓄積を生かし、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことが必要であり、我が国の優れた教育実践に見られる普遍的な視点である『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）を推進することが求められる。」（小学校学習指導要領解説 総則編P.3）と示されている。

### (2) 研究の経緯から

本校は、平成28年度より「課題発見・解決学習」の単元開発及び授業改善に取り組んでいる。昨年度は、「主体的・協働的に学び、自分の考えを深める児童の育成」を研究主題に、生活科・総合的な学習の時間と道徳科の関連を図った、「考え、議論する」道徳科の充実を目指した研究を進め、「道徳学習プログラム」の作成、「道徳科ノート」の工夫、「考え・議論する」授業の工夫等について研究を行った。その結果、自分の考えとその理由を明らかにして、相手に分かりやすく伝えるように発表を工夫する児童が増加した。また、道徳科の授業で学んだことを他の授業や普段の生活で生かしたり、他の学習や普段の生活で感じたことを基に道徳科の学習で考えたりしているとする児童の割合も増えた。これには大きく2つの理由が考えられる。1つ目は、児童の考えを深める手立てとして、教師が発問の工夫や構造的な板書などに取り組んだことだと考える。2つ目は、総合的な学習の時間や道徳科を中心として各教科等の学習内容を教科横断的な視点で捉え、有機的に働くように配列した「道徳学習プログラム」の成果だと考える。特に、体験活動と道徳科の授業を関連させたことが、児童が自分とのかかわりで道徳的価値のよさを実感し、道徳的価値の自覚を深め、その後自発的、自律的な道徳的実践ができるようになったと思われる。

一方で、「道徳の学習は好きだ。」と肯定的に回答した児童は全体として減少した。また、教師は「児童が、友達と話し合うなどして、考えを深めたり、広げたりするような指導の工夫をしている」と感

じているが、児童との意識にはズレが認められる。児童が道徳の学習に必然性を感じ、主体的に自我関与しながらよりよい生き方について考えることのできる授業の工夫、特に発問の工夫が求められる。また、児童が自らの思いを語ることができる集団づくりを進め、他者と対話しながら多様な考えに触れたり、自分の考えと比べたりすることのできる授業づくりを進めていかなければならない。

### (3) 実態分析の結果から

年度末に行った SWOT 分析では、本校児童は決められたことは真面目に取り組み、よく働くことができ、困っている人や下級生に対し親切に行動できるというよさがあるものの、周りに流されやすく、主体的に行動することが難しい児童が多いという実態が明らかになった。また、ボランティア活動に熱心な地域住民や教育熱心な保護者がいる一方、保護者同士のつながりが薄く多忙な保護者も多いなど、児童を取り巻く家庭環境が二極化していることが課題だと分かり、一層の保護者との連携や保護者を巻き込んだ教育活動に取り組んだ。

### (4) 私たちが目指すべき授業像

本年度は広島県の「道徳教育改善・充実」総合対策事業【メニュー3】「学校・家庭・地域の連携による道徳教育の充実・発展」の委託を受けることとなった。本事業【メニュー3】は家庭や地域と一体となった体験活動を行う中で、児童の自尊感情を高め、社会参加の意欲や態度など豊かな心を育てるとともに、生徒指導上の諸問題の未然防止にも資するよう、学校と家庭や地域との連携による道徳教育を推進するための実践研究を行うものである。

そこで本年度は、次のような授業づくりに取り組んだ。

- 児童が多様な考えを交流し、主体的に考えることのできる道徳科の授業
- 児童一人一人が自分事として捉え、道徳的価値を基に自己を見つめることのできる授業
- 家庭・地域と一体となった体験活動との関連を図った道徳科の授業

## 3 研究主題の意味

### (1) 「児童の多面的・多角的な思考」とは

道徳科では、1つの事柄について見る立場を変えたり、多くの人の見方を生かしたりして、対比して掘り下げていたり、あるいは1つの事柄についての自分の考えや生き方の選択肢を主張し合ったり、話し合ったりして、より明確化していきたりするなど、多様な見方による思考への発展が重視される。

例えば「いじめ」をテーマとした教材を扱うとき、「いじめる側」「いじめられる側」「傍観者」など様々な立場で捉えさせることにより、児童の考えは多様さを増す。例えば「命の尊さ」について考えるとき、「命のつながり」「命に限りがあること」「命が存在することの偶然性」など「命」について様々な面から捉えることにより、「命は尊い」という児童の考えは多様さを増す。他にも、「諦めてしまいたくなるような心の弱さと、こんな自分になりたいという心の強さ」のように相対する気持ちの存在について考えることにより、自分の考えの多様さに気付くこともある。

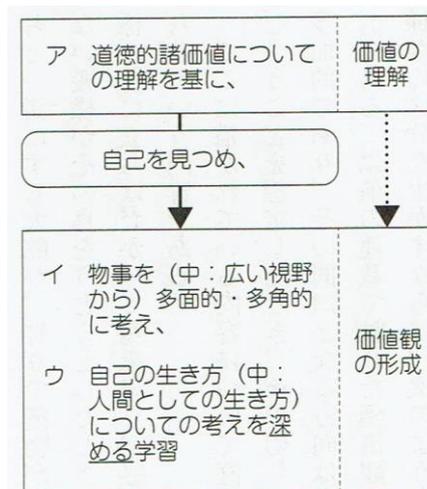
このように、俯瞰してみたり、近寄って見たり、今の時点で見たり、時間を置いてみたりする中で、

正面から見た考え、側面や背面から見た考え、合わせていく考えや比較する考え、個で考えたり、周りとの関係からの考えなど、多様な考え方が、質の高い学びを生み出すと考えた。

## (2) 「価値観への気づき」とは

「価値」と「価値観」の捉え方を次のように整理する。学習指導要領 道徳科の目標には、「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」と記されている。永田繁雄元調査官は目標が示す学びの姿を図のように示した上で、「価値」と「価値観」は違うとし、次のように述べている。(道徳教育 2018年11月号(明治図書)「新・道徳授業論」連載第8回)

理解が前提となった「価値」といわゆる「価値観」とは明確に違うということだ。…(中略)「価値」は教師が教え、子どもが考えるべき対象として客観的にあるものであり、その理解のためには時に共通の押さえどころがある。その学びは「深い学び」というよりも「基盤となる学び」というべきものになる。一方、「価値観」は子ども一人一人に内在しているものであり、個別的・個性的なものであって誰一人同じものはない。」



図：道徳科の目標が示す学びの姿

例えば、「友情、信頼」について考える学習において、「仲良くし、困ったときは親切にすることが友情だ。」と思っている児童が、資料を通して「時には言いにくいことであっても、友達のために思って注意し合い助け合うこともまた友情である。」と、これまで抱いていた「友情、信頼」に対する認識より、広がりのある理解をしたとする。これが永田氏の言うところの「共通の押さえどころ」であり、教師がねらいとする価値であり、児童が理解した「価値」であると考えられる。しかし、児童のこうした理解がここでとどまるだけでは不十分である。道徳科の授業では、一人一人生活経験や学習経験が異なり、これまで培ってきた価値観の異なる児童が、自分事として捉え、自分なりの価値観を広げたり、深めたりすることが大切である。先の例で言えば例えば、「みんなが言うように注意し合えることも大切だということはよく分かるけれど、自分だったら本当にそれができるか、とても迷った。でも、そんな友達同士になれたらすてきなと思う。」と考える児童がいるかもしれない。またある児童は「友達に注意するなんて、今の自分には難しい。友達に嫌われそうで怖い。だけど、いつか勇気を出して友達のことを思った注意ができるような自分になりたい。」と思うかもしれない。こうした、一人一人の中に育まれる個別・個性的な、自分の心のフィルターを通して児童それぞれが大切にしたいという思いを「価値観」と捉えることにする。こうした「価値観」は当然ながら教師によって押しつけられるような性格のものではない。また、学級に共通の答えのようなものでもないと言える。

## (3) 「発問の工夫」とは

全ての授業において、教師の発問が重要であることは言うまでもない。道徳科においても、教師

の発問の良し悪しが授業を大きく左右する。

(1) で述べたような「多面的・多角的な思考」は、子ども同士の協働、教職員や地域の人などとの対話、先哲の考え方を手掛かりにした対話など、自分と異なる意見と向かい合い議論したりする中で(「対話的な学び」)促されるものであるが、どのような内容をどのような方法で促すかは、教師の発問に寄るところが大きい。例えば、物語の各場面について「～の時、主人公の気持ちはどうだろう。」「～の場面の時は、どのように気持ちが変わりだしただろう。」といった時系列に考えさせる場面発問ばかり繰り返しても、問題の追求にはならない。

また、(2) で述べたような「価値観への気付き」を促すためにも、教師の発問は重要である。例えば終末で毎時間「これから頑張りたいこと」を安易に語らせたり、「今日の学習のふりかえりを書きましょう。」と単に投げかけたりすることは、児童が教師の期待を押し量って語ろうとする傾向を強めたり、児童の問題意識を生かす問題追及の流れとは異なる展開になる。

そこで、発問にはどのような性質のものがあるのか整理し、授業のどの場面でのどのような性質の発問をすれば、子どもの思考が促されるのかを実践を通して明らかにしていきたいと考えた。

#### 4 研究仮説

家庭や地域と一体となった体験活動を含む「道徳学習プログラム」の充実を図りながら、道徳科の授業における発問を工夫すれば、児童の多面的・多角的な思考と価値観への気付きを促すことができるであろう。

#### 5 研究の方法

##### (1) 発問の特徴についての分析と発問の工夫

道徳科における発問にはどのような種類のものがあるのか、それにはどういった特徴があるのかを分析する。さらに、各公開授業において、教師の発問が児童にどのような影響を与えるのかを研究協議を通して明らかにしていく。(資料1 参照)

学校全体の道徳科内容項目の重点を「希望と勇気、努力と強い意志」「勤労、公共の精神」「伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度」「生命の尊さ」と設定する。各学年の実態に応じ、この中から最重点項目を1または2項目設定し、研究を進めた。

##### (2) 家庭・地域と一体となった体験活動を含む「道徳学習プログラム」のブラッシュアップ

本校は昨年度、全学年が「道徳学習プログラム」とそれに伴う「児童用学習シート」を作成し実践している。「道徳学習プログラム」とは、体験活動と道徳科の授業を関連させ、道徳科の授業において、児童が自分とのかかわりで道徳的価値のよさを実感し、道徳的価値の自覚を深め、その後自発的、自律的な道徳的実践(道徳科の学習が実生活で生かされる実践)ができるようにするプログラムのことである。本年度は昨年度作成した「道徳学習プログラム」の改善や、新たなプログラムの作成等、児童一人一人が自分事として捉え、自分なりの価値観を培うことのできるプログラムになるようブラッシュアップを行うこととした。

過年度より取り組んでいる「心の元気プロジェクト」や学校行事、各学年の総合的な学習など様々な体験学習と道徳科の授業を有機的に結び付け、それぞれの体験や学習のつながりと効果について、指導案に明記していくことにした。

### (3) 道徳科学習の環境整備

- ①児童が授業で使う「道徳科ノート」を作成した。昨年度は学年により自由形式としたが、本年度はA4ノートに統一する。各教師の自由な発想を生かしながら、児童自身の自己内対話のためのツールとして利用したり、自分の変容に気付いたりすることができるよう、工夫する。ノートに直接記述してもよいし、ワークシートや学習シートを貼って蓄積していてもよいこととした。
- ②道徳コーナーを設け、掲示板に学習の足跡を掲示していった。
- ③道徳科カリキュラム棚の整備を行い、研究の蓄積を行った。

### (4) 授業研究

年3回全体授業研究（低・中・高ブロックより各1回ずつ）を実施する。授業実践を参観し、協議の柱に沿って授業分析を行うことで、研究主題に迫る授業づくりをする。全学年、全体授業研究を実施し、協議の柱に沿って授業分析を行った。

なお、本全体授業研修は、広島県「道徳教育改善・充実」総合対策事業【メニュー3】を兼ねており、海田中学校区の海田中学校、海田東小学校職員も参加した。

（第1回：6月5日 第2回：10月29日 第3回：2月4日）

#### 協議の柱（道徳科の授業）

- 柱1 家庭や地域と一体となった体験活動との関連を図った「道徳学習プログラム」の工夫は、どうだったか。
- 柱2 児童の多面的・多角的な思考と価値観への気づきを促すための教師の発問の工夫はどうだったか。

### (5) 検証計画

#### ①研究授業の検証

柱1の検証方法・・・児童の発言や、道徳ノート等の記述

- ・「道徳学習プログラム」の体験が、児童の意識と有機的に結びつき、実践の場が確保されたものになっているか、児童の発言や、道徳ノート、特に「学習シート」の記述から検証し、年度内により良いものに改善する。

柱2の検証方法・・・児童の発言や、道徳ノート等の記述

- ・児童の発言や様子を記録として残し、教師の発問がどのような影響を与えるか分析し、振り返りに生かす。
- ・児童の道徳ノートの記述内容から、児童の価値観への気づきを知る手がかりとする。

#### ②児童及び教職員の意識調査の実施と分析

- ・年3回のアンケートを実施し、教務部が分析する。

	全校統一の 内容項目の重点	各学年の実態に応じた 最重点項目
第1学年	「希望と勇気，努力と強い意志」 「勤労，公共の精神」 「伝統と文化の尊重，国や郷土を 愛する態度」 「生命の尊さ」	「希望と勇気，努力と強い意志」
第2学年		「生命の尊さ」
第3学年		「希望と勇気，努力と強い意志」 「伝統と文化の尊重，国や郷土を愛する態度」
第4学年		「伝統と文化の尊重，国や郷土を愛する態度」
第5学年		「勤労，公共の精神」 「伝統と文化の尊重，国や郷土を愛する態度」
第6学年		「希望と勇気，努力と強い意志」

## 6 研究の結果

学校全体の道徳科内容項目の重点を及び各学年の最重点項目を(表1)のように設定した。また、5回の理論研究及び、全員公開授業を実施し、年間11本の授業研究会を実施した。ここでは、海田中学校区の海田中学校、海田東小学校職員も参加した広島県「道徳教育改善・充実」総合対策事業【メニュー3】に係る、第1回授業研究(6月5日)、第2回授業研究(10月29日)の結果について述べることとする。

### (1) 第3学年1組授業研究会

主題名：感謝の気持ちをもって【内容項目 B 感謝】

教材名：「大通りのサクラなみ木」(東京書籍)

本時のねらい：自分の生活が、間接的にも様々に、多くの人々によって支えられていることに気づき、そうした人々を尊敬し、感謝する心情を育てる。

授業では、児童の次のような姿を見取ることが出来た。

- ・総合的な学習の時間にゲストティーチャーとして来てくださった方の名前を挙げながら、児童が発言していた。学級の全員が知っている地域の方をイメージしながら、考えを深めていた。
- ・【D批判的な発問】「直接何かをしてくれたわけではない相手に『ありがとう』と思うだろうか。」や「大変ならやめればいいのか。」のような揺さぶり発問から、「地域」「みんなのために」などのワードが出てきた。児童が思考を転換しねらいに迫る気づきについて多数発言していた。
- ・役割演技で、【C投影的な発問】「もし、この時ばかり大西さんにサクラの前で会ったとしたら、自分だったら大西さんに何をいうか。」は、直接何かをしてくれたわけでもない人物に対する、児童に内在する感謝の気持ちを引き出す発問であった。
- ・事前の実態として、自分のために、直接的に助けてもらった人に対しては、素直に感謝の気持ちを抱き表出することができる児童が多いが、地域の方の存在に充分に気づき感謝の気持ちを抱いている児童はあまりいなかったが、自分たちの安全を守ってくださっている交通安全ボランティアの方や、地域行事をささえてくださっている方に感謝の気持ちを伝えようとする場面が多く見られた。
- ・あったかタイムでは、多くの振り返りの観点が出されていたが、悩んでいる児童もいたので、今回の授業では、道徳性そのものの視点を入れて、「直接何かしてもらってなくても間接的に多

くの人々のよって支えられていることに気付き、感謝する気持ちが芽生えましたか。」と問うのもよい。

## (2) 第4学年1組授業研究会

主題名：友達と信頼しあう【内容項目 B(9) 感謝】

教材名：「ぼくらだってオーケストラ」(東京書籍)

本時のねらい：市の連合音楽会に向けて、練習を重ねるてつおとなつみの心情を考えることを通して、友だちと互いに理解し合い、信頼し、相手のことを思っけて励まし合いながら共に伸びていく関係を築こうとする心情を育てる。

- ・ 道徳学習プログラムを見える化していたので、常に児童は意識できていた。体育科のポートボールなど、全員が共通体験と、共通の認識を抱いているので、学級の認め合い、協力を実感できた発言が多数見られた。
- ・ 発問分析表による発問のA・B・Cの意図が明確なので、児童がよく発言した。
- ・ 道徳科以外の日常の場面での担任教師の児童理解が深いので、実態に合った切り返し発問に、児童がよく反応した。

ここでは、2つの授業研究について述べるにとどまるが、児童の変容より、研究仮説「家庭や地域と一体となった体験活動を含む「道徳学習プログラム」の充実を図りながら、道徳科の授業における発問を工夫すれば、児童の多面的・多角的な思考と価値観への気付きを促すことができるであろう。」に迫ることが出来たと実感している。

## 7 研究の成果と課題

### (1) 発問の特徴についての分析と発問の工夫

#### 【成果】

- 発問分析表による4つの分類表は、発問計画を立てる時に、大変有効であった。
- 【A共感的な発問】だけが続く授業にならないよう意図的に配慮できた。
- もしも【B分析的な発問】ならば、【C投影的な発問】、【D批判的な発問】ならば、どのような発問になるだろうかと考えることにより、教師の既成概念を破った発問を考えることができた。

#### 【課題】

- 【D批判的な発問】は、主人公やお話に対する児童の考えを問うたり、子ども自身のもつ考えや生き方を問うたりするものであり、その授業のねらいに深く迫るために、重要な役割を果たす場合がある。(必ずしも【D批判的な発問】が必要だと言っているわけではない。)しかし、無数に存在する発問の中からどう問うかは、児童実態の把握の深さや、教師の力量に係る部分が大きく、その要因について明確に分析する必要がある。

## (2) 家庭・地域と一体となった体験活動を含む「道徳学習プログラム」のブラッシュアップ

### 【成果】

○ どの学年も昨年度の道徳学習プログラムを実態に合わせ、ブラッシュアップを図ることができた。また、新しい道徳学習プログラムを作成し、複数のプログラムに取り組むことができた学年も多い。

○ 「道徳教育改善・充実総合対策事業」質問紙調査結果より

本質問紙調査は、保護者は自分の子どもについて、地域関係者は地域の子どものことについて、教職員は本校の児童について、「自尊感情」「思いやり」「規範意識」「社会参加」に係る12項目と、中学校区設定の2項目の計14項目について本年度5月と12月に調査したものであり、その肯定的評価を比較すると、次のような結果が得られた。

「自尊感情」「思いやり」「規範意識」「社会参加」のいずれの項目においても、また、児童のみならず、保護者、地域関係者、教職員全ての肯定的評価が、5月より12月が上回っているという結果が出た。

中でも「社会参加」の項目の伸びが高く、「社会参加」の3項目の伸びを合計すると、児童12ポイント、保護者27ポイント、地域関係者28ポイント、教職員67ポイントであった。特に教職員の伸びが大きい要因として、総合的な学習の時間や生活科と関連を図った道徳学習プログラムが充実したことが挙げられる。

3年生は「やさしさ発見・とどけ隊」の学習において地域の自慢を探し、マップを作成する活動を行い、福祉の学習を核として、老人ホームとの交流を行ってきた。4年生は、防災の学習を中心としながら本校児童のみならず、保護者や地域関係者に対する発信を行ってきた。5年生は、「南小校区お宝発掘し隊」の学習で、校区に残る伝統や文化財などを調査し、保護者や地域関係者に積極的に発信してきた。また、6年生は、「ぼくの夢 わたしの夢」の学習において、身近な人物である家族や地域の卒業生に話を聞くことで、自分事として捉え、職業観を広げることにつながった。1・2年生の生活科の学習においても体験と結びついた学習がどの単元にもあり、道徳学習プログラムとしっかりと結びついている。積極的に地域学習を取り入れたり、地域に向け発信してきたりしたことにより、児童自身が「地域のことをもっと知りたい。地域のために何かしたい。地域の行事に進んで参加したい。」という意識が高まったことによると考える。また、そうした児童の活動に対して保護者や地域住民に協力を仰いだことにより、結果として認知度や関心が高まったと考えられる。

### 【課題】

- 道徳学習プログラムと有機的に結びついていることが実感できるものについて、その要因を明確にしていく必要がある。道徳学習シートへのコメントの書き込み、毎日の生活の中に道徳の学びをちりばめる努力等、日々の道徳教育の充実も図っていきたい。
- アンケート結果より、児童の自尊感情に係る項目で、「自分のよさは、まわりの人から認められていると思う」の結果が思うように伸びていない。児童が自己実現できる場を増やしながらか、賞賛される場面を意図的に計画する必要がある。

### (3) 道徳科学習の環境整備

#### 【成果】

- ノートに学びの足跡を継続的に残したことにより、児童自身が自分の考え方の変化に気づいたり、学び方について振り返ったりすることができた。
- ノートを用いることにより、書く活動を取り入れることを意識できた。児童も書くことで自分とじっくり向き合うことができた。  
(ノート見本 別紙参照)
- 道徳コーナーを設置したことにより、他学年の学びについて広く知ることができた。特に、道徳学習プログラムの様子が分かった。また、保護者や地域の方に広く知らせることができ、理解をしてもらう助けになった。
- 道徳科カリキュラム棚は、全学年、内容項目ごとに引き出しを設けた。本年度は初年度なので、使用した指導案や板書の写真、資料などをストックした。次年度の授業者の参考になるだろう。



#### 【課題】

- 1時間ごとのノートの活用はどの学年もよくできているので、児童がノートを読み直すなど、年間を通した活動を取り入れると、学びがつながっていくので、年間を見通した活用を図ってきたい。
- 本年度は、作成した資料をストックしていくことが中心だったため、道徳科カリキュラム棚を誰でも使いやすいように整理をし、定期的にチェックするなどして、内容を充実させていく必要がある。

# ゆきひょうのライナ

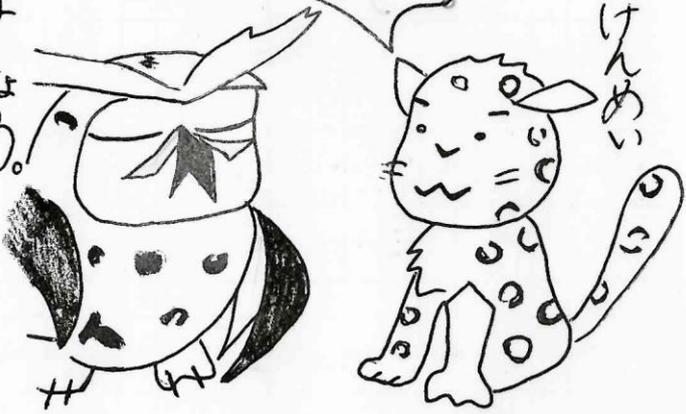
名前)

●ライナはみみずくのおじさんの「なくなりたいのちのぶんもいっしょうけんめい  
生きることじゃ。」ということばを聞いてどう思ったでしょう。

いつかなくなるんだ。いのちをいっておいきったんだ。  
いのちもきもらうていまままでいのちはじいかないなと  
思ってる生きるためになんかたべてきたんだ。いのちを思って  
きうぬもうしぎをおってどりもい思たを食べようとして  
いのちをもらっていたんだ。

自分のいのちのもとになっている食べものについて思ったことを書きましよう。

いつもたべているものはいのちがあったけどあたしたちのために  
いのちをくれてるのだからいっしょうけんめい生きていかなければ  
なれないと思いました。



児童のノート例

第4学年 B相互理解・寛容

〈テーマ〉  
 分かり合う  
 〈合い言葉〉 言葉は「心」 話せば分かる！

転入生のトムがそうじをしないこと

人まかせにしないで  
 みんなも注意してよ  
 なんでやらないのかな  
 そうじの仕方が分からないのかな

〈日本〉  
 自分が使った教室は自分たちでそうじ

〈トムの国〉  
 せいそう員(大人)がそうじ

話し合えばわかる  
 相手に理由を聞けば理かし合える。

知らずにごかいしてる。

〈ふり返り〉  
 私は、いろんな国での生活の仕方は、日本とちがうと分  
 かりました。  
 [ ] がすんでいた中国では、ごはんを少しのこしてお  
 なかみたりといたこととを表現するそうです。日本では、  
 全部食べないといけないのがマナーだけど中国では、少し  
 のこすのがマナーということが分かり問題がこぼれしま  
 した。

私は、その人に関わなくても自分で調べたり、知って  
 る人にインタビューしたりするとも思いました。  
 そして私は、足が悪くて体育ができないときになんて  
 人のんて聞かれました。ちやんと話せば分かってくれた  
 のでちゃんと話したいです。

この学習を通して、みんながは部をみるも、  
 ちやんと話せば分かるね [ ] のことを知ることが、  
 [ ] がごはんを少しのこすの理由がわかって、みんなも

児童のノート例  
第5学年 D 感動・畏敬の念

美しい真心の書き

五年

ひよの屋

？ 美しいとは、どうゆうことか。

人にやさしく親切にしてあげることで  
かなるゆうこと。

◎あなたは、ひよのおこないのどんなどころに心を動かされましたか。

<sup>おしきき</sup>  
政吉が川がらの朝のホタルをうつら  
として川に落ち木とかにひびが飛び  
くで助けをくれたヤサシ  
とらに心を動かされた  
た。



美しいとは...

~~自分を助けてくれた人も人を助けたり親切  
にしてくれること~~

ふりかえり あなたは、これまでに美しい心や行いに接してどんな気持ちになりましたか。

~~私も友達に親切にもらった時にはうれし  
くなったので村の人たちも優しくされたのがな  
る。私も相手のことを思いで親切にしたい  
です。自分の経験を重ねて考えたことや  
んも大い...心ももてると思ひます。~~